論　文

保育者養成校における学生合宿研修とその意義

Student Training Camps and their Significance within the Training School for Nursery and Kindergarten Teachers

小　芝　　隆　　開　仁　志
KOSHIBA Takashi and HIRAKI Hitoshi

Ⅰ　はじめに

昭和38年に創設された富山女子短期大学（現富山短期大学　以下「本学」）に、県下初の幼稚園教諭養成の保育科（現 幼児教育学科　以下「本学科」）が開設されたのは昭和42年４月である。翌昭和43年度入学生からは保育士（当時保母）資格の取得も可能となった。

教育課程の授業展開が軌道に乗った昭和45年頃から、保育者を目指す学生の資質向上のために、教育課程外の様々な活動の取り組みが行われるようになった。昭和46年２月に開催された２年生の保育研究発表会（その後名称は「卒業研究発表会」「総合演習発表会」となる。「総合演習発表会」は教育課程の一環として実施）、昭和47年３月の１年生対象の県外研修旅行、昭和48年７月の２年生対象の合宿研修などである。これらの活動は、その後も本学科の重要な教育活動として実施されてきた。

特に５月に実施される合宿研修の取り組みは、学科の一体感を醸成し、１年生はもちろん２年生にとっても、その後の短大生活の基盤を作り出している。

本稿は、本学科の合宿研修の今日までの歩み、平成20年度合宿研修の概要とこの合宿研修についての学生へのアンケート結果を基に、保育者養成校である本学科にとって、合宿研修が有する意義を明らかにすることを目的としている。

Ⅱ　合宿研修の歩み

最初の合宿研修は、昭和48年の夏季休暇に入った７月に、当時の２年生２クラス（幼児教育学科は当時８組と９組）の担任の発案で、クラス内の親睦を深めることを目的に行われた。８組は氷見海岸に近い寺院で、９組は福光町の医王山山頂のヒュッテで、それぞれ１泊２日の日程で実施した。次年度からは、クラス合同で行うことになった。

昭和38年開学当初より、４月か５月初旬に、新入生歓迎のための日帰りバス旅行が実施されていた。新入生歓迎行事といっても、学科ごとに１・２年生全員と教職員が、金沢の兼六園などの名所をバスで行き来し、見学して楽しむというもので、意識的に学生間の交流を図るための企画を含めたものではなかった。

幼児教育学科での合宿研修が、学生の親睦を深める点で効果的であったことから、合宿研修がバス旅行に代わる新入生歓迎の全学的行事と

こしば　たかし　　ひらき　ひとし（幼児教育学科）

して位置付けられ、昭和51年度より学生部主催の行事として、全学科において１・２年生合同で実施されるようになった。

本学科ではその後3年間ほど、５月にこの１・２年生合同の新入生歓迎合宿研修、７月に２年生だけの合宿研修が行われていたが、２年生にとって前期に２回の合宿研修の実施は物心両面での負担も大きく、その後、新入生歓迎の合宿研修のみ行うようになった。

このような合宿研修が行われるようになった背景には、昭和39年の県立有峰青少年の家の開設を筆頭に、昭和40年代と50年代前半に県内各地及び近県に県立や国立の青少年の家・少年の家が開設されたことも挙げられる。これらの施設は、小中学生はもちろん、大学生や青年団等の合宿研修のために開設されたものである。

本学科の合宿研修は、開始当初からすべて学生の実行委員によって準備と当日の運営が行われてきた。もちろん２年生のクラス担任が、実行委員の自主的な活動を支援してきているが、本学科では、この行事の主体は学生であることを重視してきた。

平成14年度までの合宿研修は、１泊２日の日程で実施されており、主な内容は、２年生から１年生への学生生活の紹介、青少年の家の施設を利用したキャンプファイヤー（又はキャンドルサービス）・野外炊飯・オリエンテーリング、さらにはカラオケ・ダンスなどの余興的な出し物、クイズ大会、運動会などであった。

合宿研修がスタートした前年の昭和47年３月から、１年生を対象にした県外研修旅行が平成14年度まで行われていた。この研修旅行は、春休みに２泊３日の日程で行われていたもので、先進的な取り組みを行っている障害児（者）の施設を中心とした社会福祉施設や幼稚園・保育所の見学を主な目的としていた。

またこの県外研修旅行では、美術館訪問やミュージカルや演劇の鑑賞などの表現活動鑑賞（芸術鑑賞）も目的であった。この研修旅行も、実行委員の学生が中心になって、準備と当日の運営に当たっていた。

その後、県内においても障害児（者）のための施設整備が進み、美術館等も整備されるようになったために、県内の児童福祉施設見学や美術館・絵本館の見学を授業の一環として実施するようになった。そのために平成14年度の実施を最後に、この研修旅行は廃止された。

研修旅行廃止に伴い、平成15年度より合宿研修期間を、１泊２日から２泊３日に延長した。

Ⅲ　合宿研修の概要と学生の学び

１　合宿研修の概要

合宿研修の流れについて述べる。

①　合宿研修当日までの流れ

＜前年度＞

合宿研修に関する準備活動は、前年度から始められる。まず、クラス担任は、合宿研修の日程と場所について学科内で協議した上で、合宿研修先へ予約をして、来年度予算を計上する。

次に、秋頃、学生に呼びかけ、実行委員を選出し、合宿研修の日程と場所を伝え、当日までの流れを説明する。学生は、話し合いを行い、役割分担を決める。

役割分担が決まれば、実行委員長を中心に、企画、運営をできるだけ学生中心で進めていき、担任は、サポート役に回る。

実行委員は生活班と活動班に分かれて進めていく。生活班は、日程や、部屋割り、バス乗車割りなどを決め、学外研修のしおりを作成していく。１年生との連絡も担う。活動班は、活動内容の企画、立案、実行の中心となる。

＜合宿研修が行われる年度＞

合宿研修が行われる年度になると、新入生である１年生の実行委員が選出される。２年生の実行委員は、１年生の実行委員を通じて、１年生へ合宿研修の主旨や内容を伝えていく。

実行委員は、合宿研修との打合せなども経て、詳しい企画内容や日程を決定し、しおりを作成、印刷する。しおりが完成すると、実行委員から全体へ向けてオリエンテーションが行われる。

１・２年生共にクラスごとに出し物を行うため、４月中旬から合宿研修当日までの１ヶ月余りをかけて、出し物の練習を行う。

担任は、学内に合宿研修の起案を回し、保護者へ向けて合宿研修の連絡を作成し配布する。

② 合宿研修当日の流れ

平成20年度合宿研修の主な活動内容を説明する。場所は、国立乗鞍青少年交流の家（岐阜県）で実施した。

１日目

〇幼児教育学科クイズ大会

１・２年生合同でふれあいグループをつくり、幼児教育学科に関する〇×クイズに挑戦する。

〇交流会

１・２年生の親睦をより一層深め、１年生に幼児教育学科の良さを伝える。１年生は、授業内容や期末試験などについての話を聞いたり、手遊びを教えてもらったりする。

２日目

〇オリエンテーリング

ふれあいグループに分かれ、「花の子ちゃんを救え」というテーマで、９つのキーワードを探し出す。

※「花の子ちゃん」とは、学生の教育実習園である本学付属幼稚園で、園児達がイメージしている架空のキャラクターの名前。

〇運動会

１年生と２年生、学生と教員との親睦を深め、全員で力を合わせて団結することを目指して、リレーや大縄飛びに挑戦する。ここでも、シンデレラや浦島太郎のイメージで競技を行うという模擬保育的な側面が見られる。

〇新入生歓迎会

２年生が１年生を歓迎することが主な目的だが、１年生・２年生共にクラスごとに出し物を行う。１年生は１クラスで１つの出し物。２年生は１クラスで３つの出し物がある。教員も出し物をする。

３日目

〇レクリエーション

ビンゴゲームをして、楽しむ。

③ 係の仕事

２年生の約20名の実行委員を中心に、学生が主体となって合宿研修を進めていく。教員の役割は、短期大学内の起案・調整、会計管理、保護者向けの連絡作成などである。教員は、適宜、学生が学外研修を企画、運営、実施していく際のサポート役として、相談に乗ったり、助言したりしていくことが大きな役割となる。

学生の係の仕事の内容は以下の通りである。

＜２年生＞

A　実行委員長

全体の総括、担任との連絡

B　副実行委員長

実行委員長の補佐

C　会計

会計面全般

D　生活班

生活班長

研修までの運営（１年生への連絡、しおり作成、当日の生活面進行等）

E　活動班

活動班長

活動内容の企画、立案、実行

＜１年生＞

学外研修実行委員

２年生との連絡調整、クラスへの伝達、出し物のとりまとめ

この他にも、出し物ごとに担当リーダーが決められており、学生は自主的に活動を進めていく。

２　学生の学び

①実行委員会

本学科は、１学年２クラスの編成であり、クラスごとに担任がいる。ホームルームや演習科目はクラスごとに行われ、大学祭その他の行事などもクラスを単位として行われることが多い。２年間クラスを構成するメンバーや担任が替わらないため、クラスの仲間との親しみやまとまりは生まれやすい反面、クラスを越えた交流が生まれにくい側面があることは否めない。

しかし、この合宿研修の実行委員会は、クラスの壁を取り払い、編成される。そのことで、普段の学生生活とは違った人間関係の中で、協力して物事を進めることになる。

また、学生は、合宿研修先との連絡・調整、移動に使うバス会社との折衝など、外部との連携も行うことになる。保育者になると、自分のクラスのことだけではなく、隣のクラス、園全体と連携して動くことも多くなる。また、保護者や地域との連携を行うことも多くなる。その時、学生時代にこのように協力して物事に取り組んだ活動は、貴重な経験として生きてくると考えられる。

特に、実行委員会は、企画、運営、実施を中心となって執り行うことになり、一つの物事を責任を持って最後までやり遂げる意識につながると考える。

以下は、合宿研修後の学生へのアンケートからの抜粋である。

（１年生）

「実行委員会に入っていたので、みんなの楽しそうな顔や喜んでいる顔を見たときは嬉しかった」

「実行委員だったので、仕事は多かったけれど、自分たちで計画して先輩にお礼を言えてよかった」

「何かを企画して、仕上げ、見ている人を楽しませるのは大変なことですが、保育所などでは大切な力だと思います。その力を伸ばしていきたいです」

（２年生）

「実行委員長として活動の企画から運営まで、全てに関わることができました。多くの人たちをまとめる大変さ、しっかりとした下準備、行事が終わった後の達成感など、これからの自分のためになることを多く学ぶことができました。この学外研修を成功させることができたのは、学生の皆さんや先生方、宿泊先の職員の方々の協力があったからだと思います」

「副委員長を務め、約半年前から動いて、出し物の計画、運営の話し合いを進めた。３日間休むことなく働き続けて頑張ったので、自分自身大きく成長できた。また、先生、友達、後輩から学ぶことが多かった」

「学外研修は、自分たちで作り上げるという、とても中身の濃い素晴らしいものだと再確認した。一人一人の気持ちがなければ成功しないと思うし、実行委員のリーダーが引っ張ってくれたおかげで、感謝しています」

「企画する側にいたのでどうなるか心配だったけれど、仲間を互いに頼りにし合ったり、自分が積極的に動く場面が多かったりして、協調性の大切さがわかった。幼児教育学科らしい考えを多く取り入れたため、保育者となる時の感性の必要性や、周囲のことによく目を通す事を身に付けることができた」

「仲間のいつもとは違った面を発見できた。意外とリーダーシップを発揮してくれたり、たくさん意見を出してくれたりした」

「いつも一緒にいる特定の友達とだけではなく、あまり接することがなかった人とも話すことができ、友達の大切さを改めて感じた」

「実行委員になり、オリエンテーリングでポイントに立つ役になった。この役をやって、みんなが楽しむためには、必ず誰かが頑張ってくれていることを知りました。これからは、何かをするときも誰かが頑張ってくれたお陰だから感謝の気持ちを大切にしたいと思いました」

「みんなの楽しんでいる様子を見たり手伝ったりしてくれる姿を見て、本当に達成感とうれしさで胸がいっぱいになりました」

「こんなにも放課後に積極的に残り、そして一人一人が『私これやるよ』と自分から進んで協力して動いたのは、初めてだったような気がします」

②新入生歓迎会（クラスごとの出し物）

新入生歓迎会では、２年生が新入生を歓迎することが主な目的ではあるが、クラスごとの出し物をすることに、本学科の特徴がある。

この出し物を考え、練習し、当日に発表することで、様々な学びが学生に見られる。

１年生も、入学して間もない４月に２年生から合宿研修の趣旨説明を受け、実行委員を中心に出し物を考え、練習をしていくことになる。

もちろん、授業が始まって間もないため、保育に関連する中身を取り入れるのではなく、高校までの経験をもとに出し物を考えることになる。さらに、クラスの友達と出会って間もないこと、初めての経験のため、どのような出し物をするのかイメージがつきにくいことなどから協力して出し物を考えることが困難である。

この課題を乗り越えるため、教員側としては、昨年度の新入生歓迎会のビデオを見せるように試みている。そのことで、ある程度イメージが描け、目標が持てることにつながるようである。

また、本学科の学生は、推薦入試で入ってきた者も多いことから、高校時代、クラブ活動や生徒会活動を活発に行ってきた者が多い。そのため、集団をまとめる力、企画を考える力の素地がある程度身に付いていると推測される。このような素地があるから、入学直後の４月中旬から５月中旬にかけての１ヶ月程度で、出し物を完成できることにつながっていると推察する。

２年生は、実技、保育内容・方法の授業を受けており、実習も経験していることから、自分たちで出し物に取り組むことは比較的スムーズである。

１年生の出し物は、クラスで一つであるが、

２年生になるとグループに分かれ、様々な出し物に取り組む。出し物の数が増えると共に内容もバラエティに富む。どれも保育にかかわるような内容が多く、保育者を目指す学生にふさわしいものである。例年、大型絵本、バルーンを使った表現、手遊び、ダンス、オペレッタ等が行われる。最後には、「幼児教育学科へ入学おめでとう。」という歓迎のメッセージが１年生へ送られる。

２年生は、この時期、付属幼稚園の実習があること、授業時間が過密なこと、就職活動へ向けての取り組みがあることなどから、時間的な制約は多い。しかし、学生同士で時間を調整し、短い時間でも集まり、相談し、練習を繰り返す。集まれないときは、各自で練習を進め、集まったときには、ポイントを絞り、出し物を完成させる。

このような経験は、まさに、将来忙しい保育現場に就職してから生きてくると考える。少ない時間を有効に使い、職員同士協力して目的を達成する力につながると考えられる。

また、出し物をすることによって培われる力として、表現力がある。見る人を意識して、衣装やグッズを用意したり、演出にも凝ったりする。去年の先輩に負けないように、工夫することで保育技術も上がる。学生達は、出し物を演じているときに、とても生き生きとした表情をしている。自分の中の恥ずかしさを越えて、力の限り表現する楽しさを味わっているようである。出し物をみんなとすることで、一体感とつながりを感じる喜びもある。

出し物の後は、拍手が巻き起こる。自分が表現したことが受け止められる喜びを経験する。保育者にとって、子どもの表現を受け止める感性を持つことが大切なので、このような経験は、貴重であると言えよう。

以下は、合宿研修後の学生の感想からの抜粋である。

（１年生）

「空いている時間を利用して練習したことで、クラスの団結力はより強くなり、一つのものをみんなでやりきった後は感動しました」

「どの組も練習の成果が分かるくらい素晴らしい出し物でした」

「出し物の練習をする中で、今まで話したことのなかった人とも仲良くなれた」

「ここまでくるのに衣装のことやダンスのことでつまずくことも何度かあったけれど、友達と助け合っていい演技をすることができた」

「ダンスのやり方で、いろいろともめて大変だったけれど、自分なりに頑張れたし、友達とも仲が深まった。これからの行事にはもっともっと多く自分から関わりたい」

「２年生のオペレッタはとてもおもしろくて笑いがとまりませんでした」

写真１　１年生からかけがえのない仲間に

（２年生）

「どの出し物にもグループの個性があって、すごくよかった」

「いつもどこかで失敗していたが、本番では間違えずにできていた。短期間で何か作り上げることで、一体感を出すという大切さを学んだ」

「練習過程で仲間同士でもめるなど、いろいろ

な困難もあったが、最後は、みんなと一緒に楽しくできた。大学生になってみんなそろって行事に取り組むことは少ないと思うので、貴重な体験となった。この年になって人の絆を感じることはまずないと思っていたが、経験できたことを嬉しく思う。この学外研修を通して、友達の大切さを再確認した。朝早くから夜遅くまで授業の合間をぬって練習し、発表したダンスは、とても思い出に残っている。これからの大学生活を一日一日大切にしたい」

「頑張ったことは成果として出るんだと改めて実感した」

「練習期間には様々な衝突や困難があったけれど、仲間と共に、最後まであきらめずやりとげることが大切だと改めて感じました」

写真２　保育技術を生かす２年生

写真３　新入生歓迎の気持ちを伝える

③１、２年生の交流会

新入生歓迎会で、１年生は、２年生の出し物を見て、心から感動していることが感想からも窺える。先輩のようになりたいというあこがれの思いがわき、合宿研修後も意欲をもって勉学に取り組むことにつながっているようである。

また、交流会では、２年生から、短期大学生活について様々なことが伝えられる。

手遊び、ゲーム、ノートの取り方や授業の受け方、保育実習内容、クラブ活動やアルバイトなどの学生生活まで幅広い内容が伝えられる。この時間は、基本的に教員は関わらないようにしている。２年生は経験を元に期末試験対策などの重要なことまで伝えているのではと推測するが、学生だけで行われる時間だからこそ、学生同士の連帯感が生まれ、異学年交流のよさが生きてくると考える。

以下は、合宿研修後の学生の感想からの抜粋である。

（１年生）

「先輩達が１年生のためにいろいろ準備してくださってとてもうれしかった。ここまで行事を盛り上げてくれる先輩方は他の大学や短期大学にはいないと思いました」

「ほとんど２年生が中心になって進行をしていて、私も先輩みたいになりたいと思いました」

「普段は２年生と触れ合うことがあまり無いので、この数日間でとても優しく接してもらいうれしかった」

「２年生の方が来年には保育現場に出て働かれる様子が目に浮かびました。私も先輩方のように立派な保育士になりたいと思います」

「来年は私たちが２年生となり、まとめていかなければならないと強く感じました」

「２年生が私たちにしてくれたように、次の１年生にも幼児教育学科に入ってよかったと思えるようにしたい」

「３日間、先生方が学生に手を出すことはあま

りなく、ほとんど生徒が中心となって進められていて、高校とは全く違う学外研修だなと思いました。来年は私も実行委員になりたいです」
「先輩は常に環境構成に気を配っておられたり、おもしろく説明されたりしていてすごいと感じた」
「２年生の先輩と学外研修終了後に学校で会うと話ができるようになったことがとてもうれしいです」
「先輩方のように、積極性や協調性、責任感をもった２年生になれるように私も成長したい」

（２年生）
「学年の幅を超えて、こんなふうに盛り上がれるのは、幼児教育学科だからと思った」
「いつもは男子のみで盛り上がることしかできなかったが、この日は、男女隔たり無く楽しく盛り上がれた。１年生男子とも学外研修を通じて親しくなることができて、とてもよかった」
「２年生になると、１年生のことを考えたり、よいものにしたいという思いが強くあったりすると思います。朝や放課後の練習も学外研修当日も行っていました。だからこそ思い出深い学外研修になりました」
「ふれあいグループを決めることで、１年生と２年生が仲良くなれた」
「１年生に少しでも幼児教育学科のことについて知ってもらえたのではないかと思う」

写真４　表現の楽しさを伝える

写真５　１年生からのお礼の言葉

④教員との関わり
実行委員と担任は、合宿研修の準備段階から何回も関わりをもち、準備を進めていく。学生からの報告・連絡・相談が欠かせない。
学生は、主体的に企画、運営、実施を担当する。合宿研修先の下見や交渉、バス会社との交渉なども行う。
もちろん、学生だから失敗もすれば、困難な面も見られる。しかし、その失敗や困難をどう乗り越えるかが学びになると考える。基本的には、学生の主体性に任せつつ、不足している視点を伝えるなど、ポイントは教員が押さえる。
また、困難なことが起きたときは、相談に乗り、最終的な責任は教員が持つことを伝え、精神面で支えたり、頑張りを認めて励ましていったりする。
合宿研修当日も、主に進めるのは、学生である。教員は前に出ない。そのことで、学生は、自分たちで進めなくてはならないという責任感が生まれ、自立へとつながるのではないかと考える。
宿泊を伴うため、空き時間などに、学生と教員が雑談を交わしたり、悩み事を聞いたりする時間もある。このことが、合宿研修後にも学生が教員に気軽に悩みを相談できるような関係をつくることにつながっていると推測する。授業時間以外での関わりが人間関係ではとても重要になってくるのではないかと考える。

以下は、合宿研修後の学生の感想からの抜粋である。

「先生方とも一体となって盛り上がることができてよかった」
「先生にクイズ大会でよいアドバイスをもらい、本当にためになった」

⑤本学科学生としてのアイデンティティー確立

合宿研修は、クラスの仲間、学年を越えた仲間と一緒に宿泊を伴って行われる。出し物の練習、先輩の姿を見ることなどを通して、「幼児教育学科に来てよかった」という思いや、「保育者の夢に向かって頑張りたい」という意欲がわいてきていることが感想から窺える。学生の言葉に「幼教ファミリー（幼児教育学科ファミリーのこと）」という言葉が出てくるが、自分が確かに幼児教育学科の一員となり、仲間と共に学んでいる素晴らしさを感じていると言えよう。仲間と共に協力してやり遂げた喜びは、卒業してからも大切な拠り所として精神的な支えになっていくのではないかと推測する。

以下は、合宿研修後の学生の感想からの抜粋である。

（１年生）
「富山短期大学の幼児教育学科は最高です」
「富山短期大学に来てよかったと改めて思いました」
「この行事で、クラスのことがとても好きになりました」
「学外研修前に比べると学科全体の雰囲気が明るくなったように思います」
「２年生と交流しながらたくさんのことを教えてもらいました」
「幼児教育学科の素晴らしさを来年の１年生に教えてあげられる２年生に自分もなりたい」
「学外研修では、クラスが一つになれたと思います」
「まだ、出会って１ヶ月ちょっとだけれど、みんながかけがえのない存在になった。本当にみんなに感謝しているし、自分自身大きく成長できた」
「一つのことをみんなで高め合えたことが何よりもよかった。この研修で学んだことを保育士になった時に生かしたいと思った」
「最後は自然に涙があふれてきました。この幼児教育学科ファミリーの伝統をずっと伝えていきたいと思いました」
「何をするにもみんな一生懸命で、みんなのいいところをたくさん見つけることができた」
「学外研修で友達や先生方の存在って大きいなと感じました」
「学外研修を通して、本当に幼児教育学科ファミリーになれてよかったと感じた」
「先輩方は、踊りやオペレッタなど大きい声で歌って、動きも大きくはっきりとしていてわかりやすく楽しそうに見えた。練習は大変だけれど、楽しく、おもしろくやることが大切だと思いました。自分たちで出し物をやる難しさや大変さ、やり遂げたときの楽しさがわかりました」
「幼稚園や保育園でのおゆうぎもたのしみになった」

（２年生）
「本当に楽しくて、一生の思い出です」
「来年は卒業して幼児教育学科ファミリーと別れるのがとても寂しくなった。このような大人数で、しかも短期大学生で、これほど盛り上がれるのは私たちくらいだと思う。それが、とても誇らしく思える。みんなと一生の大切な思い

出を共有できたのを嬉しく思う」
「誰もが幼児教育学科っていいなと思うのではないかと思う」
「幼児教育学科は団結力や盛り上げる力があると思ったし、みんな保育士になるという夢をもって日々頑張っているので、本当に幼児教育学科ファミリーという言葉を実感できるような３日間だったと思う」
「同じ夢に向かっている仲間って本当に大切で、心強いです。辛いことがあってもこの学外研修を思い出したら頑張れそうな気がします」
「みんなが本気になって頑張って、本気になって笑える、こんなに温かいところがあってよかったです」
「学外研修は学生時代の最高の思い出になりました」
「今後も幼児教育学科の名物行事としてさらによい学外研修になっていって欲しいと思った」
「このような経験はもうすることができないかもしれないので、最高の思い出として覚えておきたいです」
「昨年の１年生の春の頃は『何で私はここにいるんだろう』とマイナス思考気味だったのが、学外研修から気持ちが変わりました。『富山短期大学の幼児教育学科でよかった』と。だから、学外研修という行事はとてもとても大事なありがたい存在です」

Ⅳ　合宿研修の意義

１　学生間の親睦をはかる

寝食を共にしながら行われる様々な合宿研修の活動、実行委員会を中心とした学生の各係の活動、１・２年生の交流と親睦を目的に、１グループ１・２年生約10人で構成される「ふれあいグループ」などの活動を通して、１年生と２年生、各学年のクラス間、そして各クラス内での親睦が深められる。

このような親睦の深まりによって、本学科としての一体感はもちろん、各学年、各クラスの一体感が生まれる。このような一体感は、合宿研修後の本学科での能動的な学生生活の基盤となる。

２　学生と教員の親睦をはかる

研修プログラムの中には、オリエンテーリングや運動会、新入生歓迎会での教員の出し物など、教員が参加する活動も含まれている。豊かな自然に囲まれた施設で寝食を共にしながら、しかも時間的にゆとりのある一日の流れの中で行われるこれらの活動は、学校では得ることのできない、学生と教員の親睦を深める。このような親睦は、「１」同様、教員にとってもその後の大学での学生への能動的な教育活動につながる。

３　学生生活への１年生の適応と２年生の自覚の促進

本来この合宿研修は、新入生歓迎の行事として行われているので、交流会では、２年生が本学科での授業や幼稚園・保育所での実習などを１年生に紹介する。また、新入生歓迎会では、新入生歓迎のための出し物などが行われる。

このような活動は、１年生の学生生活への適応を促進する。

さらに、ほとんど教員の力を借りずに、合宿研修を手際よく迅速に運営する２年生実行委員の姿や、出し物での２年生の豊かな表現力との出合いは、自分もあのような２年生になりたいという具体的な短大生像を１年生に抱かせる。

またこのような２年生による１年生歓迎のための行事の企画・準備・運営は、自ずと２年生としての自覚を培う。

4　豊かな自然とのふれ合い

合宿研修で利用してきたどの施設も、自然環境に恵まれている。近年は、国立の能登青少年交流の家と乗鞍青少年交流の家を隔年で利用している。合宿研修が実施される５月は、春たけなわの青葉若葉の季節である。

特に標高1,510mに位置する国立乗鞍青少年交流の家は、５月中下旬といえども、周囲に僅かではあるが残雪があり、桜の開花も見ることができる。このような豊かな自然とのふれあいは、以下のアンケートからも分かるように、学生の感性を高めてくれる。

「環境の変化で体調を崩して少し辛いときもありましたが、不思議といつのまにか治っている自分がいました。自然の美しさやすがすがしさを見て、感性を高めることができたと同時に、自然の力が体調を治してくれたのではないかと思います」

豊かな感性（感受性と共感性）は、保育者に求められる重要な資質のひとつである[1]。

5　行事運営の体験

準備段階での教員の支援があるとはいえ、実行委員は、数ヶ月に及ぶ合宿研修の企画、利用施設との打合せ、しおりの作成、そして当日の運営、事後の評価（反省）を行う。

このような行事運営の体験は、いずれ専門職として保育現場に立ったときの行事の運営に生かされる。

6　「表現」活動の体験

本学は平成12年度から男女共学となり、大学名称も富山女子短期大学から富山短期大学となった。

平成１１年度までは、キャンドルサービス（キャンプファイヤー）の折に、それに合わせて、有志によるカラオケやゲームなどの余興程度の活動が行われていた。平成12年度からは活動名も明確に新入生歓迎会とし、その内容もダンスを中心に手遊び、オペレッタなどの「表現」活動として、２年生はもちろん、入学直後の１年生も巻き込んで、学科学生全員で行われるようになった。

保育において、その「ねらい」と「内容」を子どもの発達の側面からまとめたものが、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の５領域である。この５領域において、以下に述べるように「表現」は、他の領域をつなぐ重要な役割を果たしている。

心身共に「健康」な子どもが、周囲の環境（「人間関係」、「〔物的〕環境」、環境としての「言葉」）に自ら関わる（働きかけとしての「表現」）。子どもは、環境に関わった経験を身体的表現・造形的表現・音楽的表現・言語的表現などの様々なかたちで表現する（経験の再現としての「表現」）。このような「働きかけとしての表現」と「経験の再現としての表現」を通して、子どもは自らの発達を獲得すると考えられる[1]。

学生の１ヵ月にわたる出し物の練習は主に「働きかけとしての表現」として、また合宿研修当日の発表は主に「経験の再現としての表現」として意味付けることができる。

新入生歓迎会での学生の出し物の取り組みは、自らの「表現」活動の体験である。それゆえ、この経験は、保育の場における子どもの「表現」を学生が体験的に理解する場になっていると考えることができる。

この「表現」活動への取り組みは、本学科学生の学生生活に、以下のプラス面も生み出している。

合宿研修では、２年生は各クラスでそれぞれ

３グループに分かれて出し物を発表し、１年生もクラスごとにひとつの出し物を発表する。

そのための練習が、４月当初より各クラスの空き時間や放課後に学内で行われる。平成12年以来、この練習が、幼児教育学科の春の恒例の風景になっている。

この出し物への学科全員での練習の取り組みが、合宿研修に向けた雰囲気作りになっている。このことによって、実行委員を除けば、大部分の学生にとって、当日だけの活動であった合宿研修が、４月当初からの全員の活動として意識化されたといえる。その分、今まで挙げてきた合宿研修の意義が、より一層各学生のものとして内面化されたといえる。

Ⅴ　まとめ

合宿研修は、「Ⅲ」の学生の感想から分かるように、本学科学生の学生生活にとって、大きな意義を有しており、それらの意義を整理すると「Ⅳ」のようにまとめることができた。

さらに、意義の「１　学生間の親睦をはかる」や「３　学生生活への１年生の適応と２年生の自覚の促進」は、発達心理学の面から以下のように意義付けることもできる。

アメリカの発達心理学者Hall，Stanleyは、青年期（12歳～25歳頃まで）は人生における「疾風怒涛の時代」であると述べた。心身共に子どもから大人への過渡期にある青年は、しばしば心身の不安定に見舞われる。特に身体的に大人へと成熟する思春期と重なる青年期前期（12歳～17歳頃まで）は、情緒面の不安定が強まる。

短期大学の大半の学生は、18歳～20歳の青年期中期にある。短期大学は、入学の年と卒業の年の2年間であり、２年次に入ると勉学に就職活動が重なる。しかも本学科の学生の場合、この2年間の学習を通して、幼稚園教諭二種免許と保育士資格を取得していく。資格取得のために、幼稚園と保育所その他の児童福祉施設等で、2週間にわたる実習を5回履修する。

この２年間に、学生は多くの課題や悩みに直面する。それゆえ、同じ課題や悩みに直面し、それを共感し合える友人の存在、そしてその友人達と創り出すクラスの一体感が、重要な意味を持つ。

日頃学んでいる学校を離れ、豊かな自然に恵まれた施設のなかで、友達全員と寝食を共にしながら展開される合宿研修は、友人の存在を確認し、クラスの一体感を醸成する上で、またとない機会となっている。

さらに「Ⅳ－６」で述べたように、新入生歓迎会のプログラムを始めとして合宿研修そのものが、本学科学生全員の「環境への働きかけとしての表現」と「経験の再現としての表現」のダイナミックな場となっている。この意味で合宿研修は、これらの「表現」を通して、各学生が保育者として必要な資質を身に付ける機会となっているといえる。

以上のように合宿研修を考察してみると、合宿研修は、教育課程外の活動ではあるが、保育者として必要な資質を習得していく本学科の教育課程に、学生が能動的に関わっていくための基盤を作っている活動であるといえる。この意味で、保育者養成校の教員として、この合宿研修を充実させていくための学生の自主的活動支援が重要である。

参考文献

（1）小芝隆　2008　幼児理解の理論と方法
富山短期大学紀要第43巻（2）

（平成20年10月26日受付、平成20年10月31日受理）